

活動報告書

報告者氏名：福井喜章（研究協力者：伊美聡、田中直壽）所属：大阪府立和泉支援学校

記録日：2015年2月26日

【対象児の情報】

・学年

特別支援学校中学部2年女生徒 Aさん

・障害名

知的障がいを伴う自閉症

・障害と困難の内容

場面緘黙があり、家族のみのかかわりに留まる

【活動目的】

・当初のねらい

発信を受け止めてもらえる機会を重ねることで、「伝える」ことへの意欲を支えていく。また、発信の方法を増やすことで、「伝える」場を多様にしていく。そして、信頼できる対象を増やすことで、Aさんの世界を広げていく。

・実施期間

2014年4月8日～2015年2月

・実施者

福井喜章：1年から継続した担任（美術教師）

担任B：2年生時から担任（女性・体育教師）

担任C：2年生時から担任（男性・体育教師）

・実施者と対象児の関係

学級担任

【活動内容と対象児の変化】

・対象児の事前の状況

・小学校高学年ごろから場面緘黙の状態になり、そのころから、不登校ぎみになる。そのこともあり、本校中学部へ進学した。（「誰もいや!!」時代。転学後も、周囲への強い拒否は続いていた）

・中学部入学後も場面緘黙の状態が続いていた。まずは彼女の好きな絵を描くところからと考え、場を共有したり応答が無い時でも声をかけ続けた。はじめはほとんど反応が返らなかったが、少しずつ、福井の声がけにだけ反応を返すようになり、次第に福井とだけはやり取りができるようになっていった。（「この人となら」時代。福井とだけ関係が持てるようになってきた。）

・ただ、他の教師やクラスの友だちとの関係を持つことはできず、依然として周囲を拒否するように下を向いて無反応な状態が続いていた。

・活動の具体的内容と対象児の事後の変化

（1）発信を受け止めてもらえる機会を重ねることで、「伝える」ことへの意欲を支えていく活動。

①絵カードから「DropTalkHD」 →「選択」することから発信のスタート

②「カメラ機能」の活用 →思いを「共有」する手段のひろがりへ

③「パラパラ漫画アニメーター」の活用 →アニメ作りから筆談でのやりとりへ

（2）信頼できる人とのやり取りの場を共有することを通じて、関わりを広げていく活動。

④メッセージ機能、SNS“ByTalk”の活用 →安心できる場の共有からかかわりへ

①を通じて



- ・4月当初は、選択することで発信ができることを狙って、活動のふりかえりを言う時に、絵カードを使用した。当初はとまどっていたが、「選ぶ」という行為は彼女にとって取り組みやすかったようで、次第に簡単な選択ができるようになって行った。
- ・自分が選択したカードを通じて思いが伝わる場面が増えてくると、「ここには自分の選びたいカードがない」という意志を伝えてくるようになり、視覚シンボルでコミュニケーションの本を見ながら、自分でカードを選んで増やしてほしいと要求することができた。また、選択したものを小さい声で読むようになった。
- ・9月に入り、より伝えたい思いが増えてきた様子だったので、教師に作ってもらわなくても自分で多様なシンボルから選択できる、DropTalkHDの活用に移行した。同時期に、思いを共有したい気持ちから、アプリの画面をテレビ映し、自分の声で発表をすることも開始した。AさんがDropTalkHDを操作して気持ちを伝える様子を、友だちは、聞きながら食い入るように見つめるようになった。Aさんの発表を聞いて友だちが感想を言い、またそこから話題が広がる場面も見られた。Aさんはそうした友だちの反応に喜び、笑顔で楽しかったことを話すようになっていった。
- ・こうした活動がAさんと友だちとの関係をつなぐようことになり、同時にこの活動を一緒に行った担任Cとの関係も広がった。それまでは担任Cからの働きかけにあまり興味を示さなかったのが、少しずつ反応を返す姿が増えていった。自分にとって大切な活動を支えてくれた担任Cに対して、Aさんの思いが変化して行ったためではないかと思われた。



画面に映しながら楽しかったことを発表している様子

②を通じて



- ・6月の宿泊学習から写真を撮影する取り組みを開始した。写真を共有することで、自分の思いが「伝わる」体験を重ねて欲しいと考え、撮影した写真を学校や家庭で鑑賞する機会も持った。何度も自分で表示させながら、楽しく振り返ったり、それを見せながら気持ちを共有しようとしたりする姿が見られた。
- ・9月に入り、動画も撮影するようになった。



送られてきた写真、動画の例

同時期に、写真や動画をメッセージを使って共有することも開始した。当初は、写真もメッセージの内容も、自分のことが中心であったが、次第に家族や親戚のことに話題が広がっていき、10月頃になると、自分の住む町で見つけたことも送ってくるようになっていった。それは、ごく自然な会話に近いものであり、日常の中で心が動いた場面を「知らせたい」という思いで送って来てくれたように思われた。Aさんの中で、「発信の方法」と「伝えたい」という思いの広がりを感じた。

③を通じて



- 得意な絵を描く活動を、かかわりを広げていくチャンスの1つにできないかと考えて取り組んだ。当初は棒人間を描いてそれが動くという新規性を楽しんでいただけだったが、「動く画面」に文字を綴ってのやり取りがはじまった。内容は、最初は答えやすい問いに単語で答える程度だったが、次第に好きな物や趣味の話などの話題に変化していった。

パラパラ漫画の一面面ずつがおたがいの発言になり、動く紙芝居のように会話がつながっていくことを楽しむ様子が見られた。何度も再生させては笑顔になり、意欲的に質問に答える姿も増えていった。

- そんな中、この活動の主体となった担任 B との関係に変化が見られるようになっていった。

自転車の練習をするパートナーに A さん自ら「担任 B としたい」と意思表示したり、担任 B の似顔絵を描いたり、かかわりが広がった。



自転車乗りの練習



担任 B 似顔絵

変化 1 (6月頃) : Aさんと自転車乗りの練習を行う (左写真)

変化 2 (7月頃) : 担任 B の似顔絵を描く (右写真)

④を通じて



- 4月当初、すでに関係ができていた福井との1対1のやりとりを開始した。最初は福井からの働きかけに応える程度だったが、次第に相手の状況を思いやる内容や、長文のメッセージを送信されるようになった。病欠した福井の様子を尋ねたりする等、Aさん発のコミュニケーションの手段として、広がりが見られた。

- 9月からは、担任 B、C も参加した。さらにその他の教師とのやりとりを行うことも期待して、メッセージから学校向け SNS "ByTalk" の活用へ移行した。

当初、Aさんは SNS を使用することに対して警戒感を示していたが、福井・担任 B・C とは上記①②③の取り組みもあり、すぐになじんでいった。

- 次第に A さんは、相手によって話題を変えて発信することもできるようになっていった。

- 日常のコミュニケーションの場面を考えたとき、「友だちが会話しているのを横で聞いている」という話題への参加の仕方もある。「共通の話題」というのは、必ずしも自分が発信に絡んでいなくても生まれてくる。こうした経験も A さんは他の子に比べて少ないと感じていた。教師達の会話を SNS という場で一緒に「聞いて」いた後、リアルな場面でその話題になった際、「自分も知っている」ということが、とても嬉しい様子だった。その後、SNS 内のやりとりから、日常の中で話題が広がったと感じる場面が増えていった。

- そんな中、Aさんが休んだ時に友だちを気遣うメールを送信してきた。(右写真)

彼女が「みんな」という表現を使って呼びかけたのは、これが初めてである。

これ以降 SNS 内にいない友だちの話題や相手への思いも、SNS 内に発信するようになった。



教師たちと A さんの SNS でのやり取りの様子



友だちを気遣うメッセージ

【報告者の気づきとエビデンス】

・報告者の気づき

多様な手だてを持てたことが、発信の方法の広がりにつながったのではないか。

可能な方法で関わったり、発信を受け止めてもらえた体験が、安心できる対象を広げて行ったのではないか。

- 「話す」ことをスタートにせず、彼女が可能な手だてを模索していったことで、以下の変化が見られた。
- ・発信を拒否⇒少ない中からの選択⇒自分で選択肢を増やしていった。
- ・返答を拒否⇒書くことで応える⇒書くことで発信する⇒写真や動画で共有できる情報を補完しはじめた。
- ・日常のやり取りを拒否⇒話題が共有できた⇒日常のやり取りが広がった。
- 福井以外を拒否していた状況から担任 B や C へとも関わられるようになっていった。
 - A さんの発信の場面や手だてを増やすことで、それを共有する中で受け止めてもらえたという実感から、「安心できる相手」が増えた。
- 担任から、クラスの友だちにもかかわりが広がった。
 - 信頼できる人が増えた事で、「関わり」への意欲が高まってきている。
 - あれほど周囲との関わりを拒んでいたのに、時には友だちと歌を歌いながら下校する姿も見られるようになった。

・エビデンス（具体的数値など）

・下のかかわりの変化を現した表や観察記録から、A さんの関わる対象者は広がったと考えられる。活動当初は、福井のみとのかかわりのみだったが、活動を重ねることにより、7 月ごろには、担任 B とのかかわることができるようになった。その後、一日の活動のふりかえる活動を通じて、10 月ごろには担任 C とのかかわりも行うようになった。2 月現在では、SNS でのやり取りを通じて、担任 B、C は福井とのかかわりに近い関係を持つことができるようになってきている。

5月	思いを伝えてくる	話す	筆談に応じる	意志をジェスチャーで示す	書かれたものを小声で読む
福井	○	○	○	○	○
担任B	×	×	×	×	○
担任C	×	×	×	×	×

↓

11月	思いを伝えてくる	話す	筆談に応じる	意志をジェスチャーで示す	書かれたものを小声で読む
福井	○	○	○	○	○
担任B	○	○	○	○	○
担任C	×	○	○	○	○

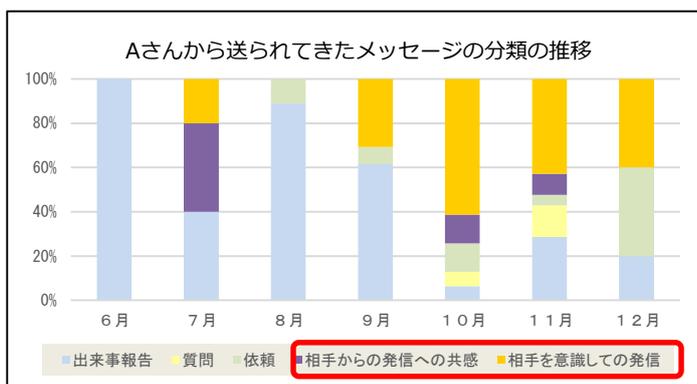
5月と11月段階のAさんと福井、担任B、Cとのかかわりを表した表

4月・周囲からの働きかけに、反応を返せなかった。
・友人が話してきた時は、髪の毛で顔を隠して、ひたすらうつむいていた。

11月・終わりの会で友人の言い方をまねしながら楽しかったことを話す姿が見られるなど、学級の中であれば、複数の人の前で話せるようになってきている。
・生徒会選挙に出馬する友人のためにポスターに絵を描いたり、頼まれて友人が好きなアニメの絵を描いたりする姿が、日常に見られるようになった。
・自発的に話したり描いたりする発信が増えている。

Aさんと友だちとのかかわりの変化（観察記録より）

・入学当初の「誰もいや!!」というような激しい拒否を示すことはなくなった。メッセージ機能や SNS を活用した取り組みから、発信の内容も変化した。（右グラフより）当初は、A さん自身の周りのことを送ることが多かったが、9 月に入り相手からの発信への共感や、相手を意識しての発信が多くみられるようになった。他の人を思いやり、相手の思いに応えようとする意欲も高まってきたからではないかと考えられる。



・絵を描くことが唯一の発信だったころは、どんなに頼まれても誰かの依頼で絵を描くことはなかった。今は、「絵を描くこと」は彼女の「得意な発信」として、周囲からも認められてきている。友だちに喜んでもらうことで、より自信もつけてきている。

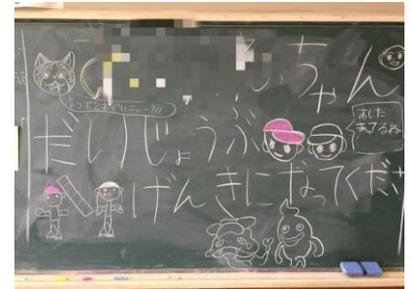


Aさんが絵を担当した学習発表会のポスター

・その他エピソード（画像などを含め）

(1) Aさんが楽しみにしていた運動会前に欠席した時

9月の運動会前日に体調不良で欠席した際、「みんな、ごめんね」と送ってきたAさんのメッセージを受けて友だちが黒板に思いを描いた。担任がこの画像を共有し、欠席後の不安な気持ちを支えた。運動会当日、登校してこの黒板を見たAさんはとてもうれしそうに笑顔を見せ、カメラに撮影した。Aさんにとって、運動会に参加できた事以上に、このメッセージがとてもうれしかったのではと思われる。これ以降、友だちとの関わりが増え始めた。



運動会前日に欠席したAさんを気遣う友だちからのメッセージ

(2) 12月の個人懇談の時、保護者にクラスでの様子を伝えた時

クラスの友だちと仲良く歌って帰ることを知らなかったAさんの保護者にそのことを伝えると、保護者は、「えっ、そうなんですか!？」と驚いた様子だった。家で様子は、家族のみしか話さないの、友だちと歌を歌って帰る様子を聞いて相当驚いた様子だった。

(3) 絵を使っての友だちとのやり取りの様子

「Aさんは絵がうまい」と知っていた友だちから、絵を描いてもらうよう依頼を受けた。Aさんは、頼まれた絵を調べ、絵を描き、友だちに渡した。もらった友だちは大喜びで、Aさんも喜んでいた。4月当初、「絵を描くこと」しか発信の手段がなかったころは、決してそうした依頼は受けなかった。彼女にとって「絵を描くこと」は自分からの発信の1つではあったが、応答につながってはいなかったのかもしれない。だが、発信が多様になってきた12月には、渡した絵に喜ぶ友だちを見て、「描いてよかった」「もっと描きたい」という思いが高まって来ている。今では、学習発表会に出る友だちのためにポスターを描いたりすることもあるほど、絵を通じて友だちとのかわりは深くなっている。



友だちのために絵を描いている様子

(4) Aさんから教師へのプレゼント（下の似顔絵）

Aさんは、似顔絵の名人である。しかし、教師から描いてと言っても決して描くことはない。彼女との関わりが成立し始めると、ある日突然「はい」と渡される。それは、彼女にとって「ありがとう」であったり「よろしくね」であったり、様々な意味を持つように思われた。少なくとも、似顔絵を渡された教師達は、彼女の日常に何らかの意味を持つ存在になれたのかもしれない。Aさんの思いのつまった似顔絵は、関わった教師たちにとって宝物になっている。

				
本人を見ながら描いた福井	夏休み中思い浮かべながら描いた福井	本人を見ながら描いた担任B	本人を見ながら描いた担任C	前年度担任

「誰もいや」からスタートしたAさんの本校での生活が、こうした取り組みを通じて変化しつつあることを感じている。今後は、社会に出た彼女の暮らし方や働き方を相談しながら、彼女が安心して関われるつながりを広げていく取り組みを重ねたいと考えている。